



所 感——防災と環境

京都大学名誉教授

奥 田 節 夫

防災研究所が本年4月をもって創立40周年を迎えられ、その長い歴史のなかで防災科学分野で素晴らしい業績を積み重ねて来られましたことを、心からお慶び申し上げます。

自然災害の発生は、異常な自然現象の出現とその影響を受ける人間社会の相互関連のもとに生じる一連の事変であり、社会の変遷につれて災害の発生形態が変わってくることは当然であります。最近はこの相互関連性に着目した研究も、防災研究所の内外で、人文、社会学系の研究者もふくめて活発に行われているようで、その成果を期待しております。

私も新しい職場でこのような問題に興味をもち、とくに社会の変遷と人間をとりまく環境の変化の関連性を対象にして、ささやかながら勉強を始めていますが、過去に勉強させて頂いた防災科学と最近勉強を始めた環境科学との接点において、深刻な事例にしばしば遭遇し、今後の防災科学の研究あるいは防災計画の検討に際しては、自然環境の保全を十分配慮しなければならない場合がかなり多いのではないかと考えるに至りました。

もっとも防災研究所における環境保全の研究の必要性を指摘されたのは、すでに20年前のことで、故石原藤次郎先生（第七、第九代研究所長）が防災研究所二十年史（昭和46年）に寄せられた所感のなかで、新たな分野、とくに境界領域での研究の必要性を強調され、「構想を新たにしてい、自然災害と関連の深い環境保全の問題にまで、積極的に乗り出していただければと期待しています。急激な経済成長にともなう、自然環境との調和が損なわれ、われわれの生活に大きい不安を与えるようになりました。こうした問題は、自然災害の社会、経済、法律的な立場からの研究とあいまって、私どもの大きい関心事といわねばなりません」（原文のまま）と述べられています。

このご指摘は当時の時勢からみて、研究所の大拡充を計画された遠大なご構想の一端とも考えられますが、防災科学と環境科学の連携の必要性を指摘された先覚者のお言葉だったと感銘を受けております。

ひるがえって今日の世相をみると、無謀な乱開発に対する環境保全の声は十分に社会的な賛同を得つつありますが、もっとも人命、財貨を守るために役立つはずの防災の計画、事業に対しても、環境保全の立場からの反対の声が方々で上がる時代になっています。

例えば山間の砂防工事による生態系の断絶、河川の中州の撤去による野鳥の住みかの喪失、人工護岸による沿岸生態系の破壊、あるいは河口締め切りによる感潮水域での水質、底質の悪化、

生態系への悪影響など、きわめて多岐にわたるさまざまな問題が提起されつつあります。これらの問題は科学、技術そのものの内容からくるものではなく、多くは行政的な事業実施面でのトラブルとも考えられますが、その基礎になる計画の段階で、同じく人命尊重の立場にある防災と環境保全との間に、このような意見の対立があることはまことに不幸な現実であり、その解決には防災科学と環境科学との境界領域における研究の進展が必要と思われます。

ただその対立の原因には、物理科学分野と生物科学分野とでの自然観の相違、希に起こる災害に遭遇してその恐怖を肌で感じた人と日常の生活を通じて環境の劣化を懸念する人との生活観の差異、あるいは従来行政の姿勢に対して不信、不満を抱く住民の感情など、単なる科学、技術のみで対処できない難しい要素が複合的に存在していることは明らかです。しかしながら、いま問題の争点になっているような特定の計画、事業とその影響の評価については、現在の科学、技術を総合することによってある程度の客観的判断を下せるものも少なからずあり、そのための学際的協力がもっと進められるべきだと考えます。

もちろん基礎的な学術研究の場である大学の研究所において、直接に行政的な面もからむ現場の問題に深く関わることは慎むべきでありましょうが、少なくとも防災科学と環境科学の接点を見出すための学際的視野の拡大と、現実に生じている諸事例に対する学術的、総合的な判断の規準については、研究と教育の一環として積極的に取り上げて頂きたいと思います。その努力は、将来の防災研究所の使命がより広く、より高く評価されるのに役立つのではないかと考えております。

以上、最近身近に感じたことから勝手な私見を述べさせていただきましたが、最後に防災研究所の一層のご発展と所員の皆様のご健勝をお祈り致します。